

[学術論文]

「男らしさ」に関する実証的研究

On Masculinity: An Empirical Study

石川 洋明

Hiroaki ISHIKAWA

Studies in Humanities and Cultures

No. 5

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 5号
2006年6月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN

JUNE 2006

[学術論文]

「男らしさ」に関する実証的研究

石川 洋明

要旨 男性の「男らしさ」について、調査データ（N=218、非無作為抽出、回答者は男女双方）の二次分析により検討した。多変量解析の結果、「男らしさ」は、行動様式で6つ、意識でも6つ、配偶者とのコミュニケーションで3つの成分が抽出された。成分得点の回答者属性による差から、50代既婚男性が性暴力問題に最も懐疑的で家庭外達成志向が強く、20代男性が最も感情表現や子のケアに積極的であることがわかった。また、男性の回答から、「男らしくない」と言われるのは、配偶者への期待が低く、仕事を断れる人、「男らしくありたい」と思う人は、近所づきあいがよく、仕事を断ることができず、男は経済力・忍耐が必要で家事には向かないと思っている人であることがわかった。総じて、ワークライフバランスのうちではワークに特化することが男らしさである、と考えられていることが確認された。ただし、40代と既婚者に、それにとどまらない傾向も見られた。

キーワード：男性問題、男らしさ、データ解析

目次

1. はじめに
2. 「男らしさ」の構成要素
3. 「男らしくない」と言われるか
4. 「男らしさ」志向
5. 考察

1. はじめに

本稿は、男性の「男らしさ」について検討することを目的とする。

「男らしさ」とひとことにいっても、そのイメージはさまざまであり、含意は広い。「男らしさ」を特定し分析する方法も、自己省察を中心としたもの（メンズセンター編 1996, 1997）、外国での運動の分析を通じたもの（中村 1996）、インタビュー調査を中心としたもの（多賀 2001）など、さまざまである。

それに対し本稿では、実証的な手続を用い、質問紙調査データの二次分析から統計的に引きだせる結果とその含意について検討することで、「男らしさ」の検討を進めることをめざす。

その際に用いられる調査データは、筆者の勤務する大学の課目である「社会調査実習」においておこなわれた「男性問題調査」のデータの一部である。調査全体は、いくつかのインタビューや参与観察も含まれたものであるが、ここでは、そのうちの質問紙調査部分のデータを、調査主体である学生の許可を得て二次分析した。なお、調査の全体像については、報告書（名古屋市立大学人文社会学部現代社会学科社会調査実習「男性問題」班 2003）にまとめたので、関心のある方はご参照いただきたい。

なお、この調査にあたっては、質問紙の作成、特に質問内容や文言の検討を学生と筆者共同でおこなったが、調査にあたっての質問紙の配布・回収は学生がおこなった。また、質問紙調査の対象（N=218）の選定は無作為抽出によるものではない。よって、本稿の分析結果の一般化可能性には一定の留保が必要であることは、申し添えておきたい。

質問紙の質問項目は、表1-1の通りである。

表1-1 質問項目

問1	性別役割、家族・地域内コミュニケーションに関連する行動様式
問2	性別役割、ジェンダー規範、ジェンダーによる行動様式の差異などに関する意識
問3	配偶者との役割分担・コミュニケーションのあり方（配偶者のいる人のみ対象）
問4	「男らしくない」と言われたことがあるか、「男らしく」ありたいか、など（男性のみ対象）
問5	結婚に求めるもの（6つの選択肢から1～3位を選択）
問6	生まれ変わるなら男女どちらがよいか、またその理由
問7	「男性問題」概念についての知識の程度（3択）、知識源（多重回答）
フェイス項目：	
	年代、性別、結婚・同棲現状、結婚・同棲経験、離婚・別離経験、最終学歴、職業

表にあるように、本稿のもとになった調査では、「男らしさ」とそれに関連すると思われることがらについて、行動様式、意識、パートナーとの関係、の3つに大別して質問をした。回答は、4択リッカートスケールで記入していただいた。

なお、各項目について、クロス集計とカイ二乗検定を用いて分析した結果は、表1-2、1-3、1-4の通りである（名古屋市立大学人文社会学部現代社会学科社会調査実習「男性問題」班 2003：69-77）。

「男らしさ」に関する実証的研究

表 1-2 問 1 各項目カイ二乗検定結果

		男女差		年代差	
		有意差	概要	有意差	概要
1	何でも素直に話せる相手がいる	n. s.		n. s.	
2	言いたいことを上手く伝えられなくて、もどかしく感じることもある	*	男<女	*	20代未満ピーク
3	他人とコミュニケーションを取るのが苦手な方だと思う	n. s.		n. s.	
4	近所の人顔と名前が一致	n. s.		*	40代ピーク
5	近所の人家によくあがりこむ	n. s.		n. s.	
6	町内活動やPTA活動等によく参加	n. s.		***	40代ピーク
7	理想の夫婦は「言葉にしなくても分かり合える仲」だ	n. s.		n. s.	
8	何となく家に居づらい	n. s.		n. s.	
9	なるべく他人と関わり合いたくない	n. s.		n. s.	
10	男性が育児休暇をとることに抵抗がある	***	男>女	*	50代ピーク
11	休日になんかすることがなく、時間を持て余す	n. s.		*	
12	仕事で頼まれたことは断れない	n. s.		***	40代ピーク
13	老後の世話は配偶者にしてもらいたい	n. s.		*	30代ピーク
14	親の期待をプレッシャーに感じる	n. s.		*	30代ピーク

(n. s. : 有意差なし / * : 5%水準で有意 / ** : 1%水準で有意 / *** : 0.1%水準で有意)

表 1-3 問 2 各項目カイ二乗検定結果

		男女差		年代差	
		有意差	概要	有意差	概要
1	男性はコミュニケーション下手	**	男>女	*	40代ピーク
2	女性は結婚したら家事を優先すべき	**	男>女	n. s.	
3	夫が家事を担うと妻のメンツが立たない	*	男>女	n. s.	
4	妻が夫より高収入だと夫のメンツが立たない	n. s.		n. s.	
5	離婚したら母親が親権をもつべき	n. s.		n. s.	
6	男性は女性よりも家事に向いている	***	男>女	*	30代ピーク
7	男は我慢強くあるべき	**	男>女	*	30代ピーク
8	よくしゃべる男は男らしくない	*	男>女	**	30代ピーク
9	男性は感情を表さないほうがよい	n. s.		***	50代ピーク
10	男なら何でも1人でやりぬくべき	n. s.		n. s.	
11	家族を養うのは男の義務	***	男>女	n. s.	
12	デートの費用は男性側が多く出すべき	**	男>女	*	50代ピーク
13	女性はセクハラを騒ぎすぎ	**	男>女	n. s.	
14	女性専用車両は痴漢防止につながる	n. s.		n. s.	

15	男性専用車両も作るべき	***	男<女	n. s.	
16	男性は女性よりも仕事出来る	n. s.		n. s.	
17	男性は仕事で高い地位を目指すべき	n. s.		n. s.	
18	定職についていない男性は一人前でない	**	男<女	n. s.	
19	仕事の出来ない男は女よりも肩身が狭い	**	男<女	n. s.	
20	仕事が終わらなければ残業も仕方がない	n. s.		n. s.	

(n. s. : 有意差なし / * : 5%水準で有意 / ** : 1%水準で有意 / *** : 0.1%水準で有意)

表1-4 問3各項目カイ二乗検定結果

		男女差		年代差	
		有意差	概要	有意差	概要
1	配偶者に話を聞いてもらえない	n. s.		n. s.	
2	家事分担は今のままでよい	n. s.		n. s.	
3	家事分担は話し合いで決めている	n. s.		n. s.	
4	配偶者と一緒について気づまりだ	n. s.		*	30代ピーク
5	忙しくてコミュニケーションのゆとり無い	n. s.		n. s.	
6	カッとなり苛立ちを家族に向けそうになる	*	男<女	n. s.	
7	配偶者は心の支えとして不可欠	n. s.		**	20代ピーク
8	配偶者2、3日不在でも普段通り生活可能	***	男<女	n. s.	

(n. s. : 有意差なし / * : 5%水準で有意 / ** : 1%水準で有意 / *** : 0.1%水準で有意)

2. 「男らしさ」の構造

2.1. 主成分分析

上記のカイ二乗検定結果でも、かなり興味深い結果が見られるが、項目数が多く、煩雑の感を免れない。そこで、各問の項目を集約して、一定の構造が見いだせるかどうかを検討した。主成分分析を用い、バリマックス回転をおこなった結果、問1から6つ、問2から6つ、問3からは3つの主成分が析出された。

上記で得られた主成分を質問項目とあわせて解釈すると、以下の表2-1のように主成分の含意が想定できる。

表2-1 主成分分析より想定される含意

問	番号	主成分	質問項目	質問項目の得点による含意
1	1	コミュニケーション	3、9、1 (r)、2	苦手<得意
	2	近所づきあい	6、4	つきあいがよい<悪い
	3	配偶者への期待	13、7	以心伝心・ケア志向<そうでもない

	4	家庭外達成志向	14、10 (r)、11	家庭外達成志向弱く強い
	5	家の居心地	5、8	居心地悪くそうでもない
	6	仕事が断れない	12	断れない<断れる
2	1	経済力・忍耐	11、7、10、12	男はもつべき<そうでもない
	2	分業・メンツ	4、3、19、18	男は仕事<そうでもない
	3	自己表現・ケア	1、5、9、8	男は黙って女がケア<そうでもない
	4	男の高能力	16、17、15、2	男は高能力で仕事<そうでもない
	5	仕事志向	6 (r)、20	男は家事に向かない<そうでもない
	6	性暴力意識	14 (r)、13	女は騒ぎすぎ<そうでもない
3	1	パートナーとの心の交流	1、7 (r)、5、8	ない・少ない<ある
	2	気づまり・苛立ち	4、6	ある<ない
	3	家事分担	2、3	満足<不満

(注：(r)はリバース、すなわち「得点による含意」の不等号の向きが逆のものをあらわす)

2.2. 主成分の回答者属性による差

以上の分析から得られた主成分について、回答者の属性ごとに差があるかについて検討した。方法としては、主成分得点を算出し、その属性ごとの平均について、一元配置分散分析をおこなった。その主な結果は、表2-2の通りである。

この結果を解釈すると、以下のような含意が推測される。

2.2.1. 年代による有意差

まず、年代で有意差が出たのは、行動様式からは「近所づきあい」「家庭外達成志向」「仕事が断れない」の3つの主成分、意識からは「経済力・忍耐」、「自己表現・ケア」、「性暴力意識」の3つの主成分で、パートナー関係では有意差の出た主成分はなかった。

主成分に寄与する質問項目の回答状況などから判断すると、年代による行動面での差異は、20代に比べ40代の方が近所づきあいがよく、20代に比べ50代の方が家庭外達成志向が強く、仕事が断れないと最も多く感じる年代は30代であることが明らかになった。また意識面では、男は経済力や忍耐力をもつべきだと感じているのは50代に多く、20代はそれに次ぎ、40代がもっともそういう意識が低い。男の感情表現や子のケアに消極的なのは30代が最も多く、40代、20代と少なくなっていく。性暴力について騒ぎすぎ、と感じているのは50代に最も多く、20代未満で最も少ないという結果であった。

2.2.2. 性別による有意差

性別で有意差が出たのは、行動様式からは「配偶者への期待」「家庭外達成志向」の2つの主成分、意識からは「経済力・忍耐」「分業・メンツ」「性暴力意識」の3つの主成分、パートナー

表2-2 問1～3の各主成分に関する一元配置分散分析結果

主成分		年代	概要	性別	概要	結婚 現状	結婚 概要	結婚 歴	概要	離別 歴	概要	学歴	概要	職業	概要
問 1	1	n. s.		n. s.		n. s.		n. s.		n. s.		n. s.		n. s.	
	2	***	40<u50<30 <u20<20	n. s.		***	婚<非婚	***	有<無	n. s.		n. s.		***	主婦<学生
	3	n. s.		*	男<女	n. s.		n. s.		n. s.		n. s.		n. s.	
	4	***	u20<30< 20<40<50	***	女<男	***	非婚<婚	***	無<有	*	有<無	n. s.		***	学生<現業
	5	n. s.		n. s.		**	非婚<婚	*	無<有	n. s.		n. s.		n. s.	
	6	*	20<50<40 <u20<30	n. s.		n. s.		n. s.		n. s.		n. s.		n. s.	
問 2	1	*	50<30<20 <u20<40	***	男<女	n. s.		n. s.		n. s.		n. s.		n. s.	
	2	n. s.		*	女<男	n. s.		n. s.		n. s.		n. s.		n. s.	
	3	***	30<40<50 <20<u20	n. s.		***	婚<非婚	***	有<無	n. s.		n. s.		***	自営<現業
	4	*	20<u20< 30<50<40	n. s.		*	非婚<婚	n. s.		n. s.		n. s.		n. s.	
	5	n. s.		n. s.		n. s.		n. s.		n. s.		n. s.		n. s.	
	6	**	50<30<40 <20<u20	***	男<女	*	婚<非婚	*	有<無	**	有<無	n. s.		**	現業<主婦
問 3	1	n. s.		n. s.		n. s.		n. s.		*	有<無	n. s.		n. s.	
	2	n. s.		**	男<女	n. s.		n. s.		n. s.		n. s.		n. s.	
	3	n. s.		n. s.		n. s.		n. s.		n. s.		n. s.		**	学生<現業

注：u20=20才未満

関係からは「気づまり・苛立ち」主成分に有意差が出た。

質問項目の回答状況などから判断すると、男性は女性に比べ、パートナーには以心伝心のケアの行動を求め、行動様式は家庭外達成志向が強く、男は経済力や忍耐力をもつべきだと思っており、男は仕事ができないとメンツにかかわると思っており、女は性暴力について騒ぎすぎだと思っており、パートナー関係で気づまりや苛立ちが多い。

2.2.3. 結婚の現状による有意差

結婚の現状で有意差が出たのは、行動様式からは「近所づきあい」「家庭外達成志向」「家の居心地」の3つの主成分、意識からは「自己表現・ケア」「男の高能力」「性暴力意識」の3つの主成分で、パートナー関係では有意差の出た主成分はなかった。

既婚者と未・非婚者を比べると、既婚者の方が、近所づきあいがよく、家庭外達成志向が強く、家の居心地がよく、男の感情表現や子のケアに積極的で、男は仕事上の能力が高く出世をめざすべきとは思っておらず、女は性暴力について騒ぎすぎと思っている。ただし、性暴力については、既婚者の年齢層が未・非婚者に比べて明らかに高いので、この有意差は年齢による効果とも推測できる。

2.2.4. 結婚歴による有意差

結婚歴で有意差が出たのは、行動様式からは「近所づきあい」「家庭外達成志向」「家の居心地」の3つの主成分、意識からは「自己表現・ケア」「性暴力意識」の2つの主成分で、パートナー関係では有意差の出た主成分はなかった。この結果は、結婚の現状による有意差の状況と「男の高能力」を除いて同じであった。

結婚経験者と未・非経験者の比較も、既婚者と未・非婚者の比較と同様の結果で、結婚経験者の方が、近所づきあいがよく、家庭外達成志向が強く、家の居心地がよく、男の感情表現や子のケアに積極的で、女は性暴力について騒ぎすぎと思っている。

2.2.5. 離別歴による有意差

離別歴で有意差が出たのは、行動様式からは「家の居心地」、意識からは「性暴力意識」、パートナー関係からは「パートナーとの心の交流」のあわせて3つの主成分であった。

離別経験者は未・非経験者に比べて、家の居心地が悪く、女は性暴力について騒ぎすぎだと思っており、パートナーとの心の交流が少ない。

2.2.6. 学歴による有意差

学歴で有意差が出た主成分は、まったくなかった。

2.2.7. 職業による有意差

職業による有意差が出たのは、行動様式からは「近所づきあい」「家庭外達成志向」の2つの主成分、意識からは「自己表現・ケア」「性暴力意識」の2つの主成分、パートナー関係からは「家事分担」主成分であった。

職業による行動面での差異は、近所づきあいは学生が最も悪く主婦が最もよく、最も家庭外達成志向が強いのは現場労働者で、最も弱いのは学生であった。職業による意識面での差異は、男の感情表現や子のケアに最も消極的なのは現場労働者で、最も積極的なのは自営業者、女は性暴力について騒ぎすぎだと最も強く思っているのは現場労働者で、最もそう思っていないのは主婦、家事分担に最も満足しているのは学生で、最も満足していないのは現場労働者であった。

2.3. まとめと横断的分析

以上をまとめてみると、表2-3のようになる。

表2-3 問1～3の結果の含意まとめ

<p>年代</p> <ul style="list-style-type: none"> ・近所づきあい：20代で最低、40代で最高 ・家庭外達成志向が強い：20代で最低、50代で最高 ・仕事が断れない：30代で最高 ・男は経済力や忍耐力をもつべきだと思う：40代で最低、20代は多い、50代で最高 ・男の感情表現や子のケア：30代で最も消極的、40代で少し積極的、20代で最も積極的 ・女は性暴力について騒ぎすぎと思う：20代未満で最低、50代で最高 <p>性別：男は女より</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パートナーに以心伝心のケア的行動を求める ・家庭外達成志向が強い ・男は経済力や忍耐力をもつべきだと思う ・男は仕事ができないとメンツにかかわると思う ・女は性暴力について騒ぎすぎだと思う ・パートナー関係で気づまりや苛立ちが多い <p>結婚現状：既婚者は未・非婚者より</p> <ul style="list-style-type: none"> ・近所づきあいがよい ・家庭外達成志向が強い ・家の居心地がよい ・男の感情表現や子のケアに積極的 ・男は仕事上の能力が高く出世をめざすべきとは思っていない ・女は性暴力について騒ぎすぎと思っている
--

結婚歴：結婚経験者は未・非経験者より

- ・近所づきあいがよい
- ・家庭外達成志向が強い
- ・家の居心地がよい
- ・男の感情表現や子のケアに積極的
- ・女は性暴力について騒ぎすぎと思っている

離別歴：離別経験者は未・非経験者より

- ・家の居心地が悪い
- ・女は性暴力について騒ぎすぎだと思っている
- ・パートナーとの心の交流が少ない

職業

- ・近所づきあい：学生が最も悪い、主婦が最もよい
- ・家庭外達成志向：現場労働者が最も強い、学生が最も弱い
- ・男の感情表現や子のケア：現場労働者が最も消極的、自営業者が最も積極的
- ・女は性暴力について騒ぎすぎだと思う：主婦が最低、現場労働者が最高
- ・家事分担への満足：現場労働者が最低、学生が最高

これをカテゴリー横断的に見てみると、また少し興味深いことが見いだせる。すなわち、カテゴリー横断的に見ても最も差異が出やすいのは「性暴力意識」で、学歴を除いてはすべてのカテゴリーで有意差が出ている。50代、男、既婚者、離別経験者、現場労働者が最も「女は騒ぎすぎ」という意識をもっていることがわかる。

次いで有意差が出やすいのは「家庭外達成志向」で、50代、男、既婚者、現場労働者というプロフィールをもった人がもっとも家庭外達成志向が強い行動様式をもっていることがわかる。また、「自己表現・ケア」も有意差が出やすいものであり、20代、既婚者、自営業者というプロフィールをもつ人々が、もっとも男の感情表現や子のケアに積極的な意識をもっている。ただし、男性は女性よりもパートナーに以心伝心のケア的行動を求める傾向も明確に出ており、この2つの関係については未詳である。

3. 「男らしくない」と言われるか

次いで、「男らしさ」に、上記で分析した行動様式、意識、パートナーとの関係がどのように寄与しているかを見た。方法としては、問4の第1項目で聞いた「男らしくないと言われるか」という質問への回答（4択リッカートスケール）を従属変数とし、上記で算出した問1～3の主成分得点を説明変数として重回帰分析をおこなった。これは、本来であれば、主成分得点をさらに重回帰分析にかけるのではなく、質問の得点を共分散分析によって計算しモデル化をおこなう

べきところであるが、入手できる統計ソフトの都合により重回帰分析を用いたもので、試行的なモデルと考えていただきたい。

分析により、表3-1のような結果が得られた。

表3-1 問4-1「男らしくないと言われる」に対する重回帰分析

	標準化係数 (ベータ)	t	有意確率	
(定数)		15.78235	0.000000	***
問1成分得点主成分分析1	0.040128	0.331673	0.741747	
問1成分得点主成分分析2	-0.02235	-0.17246	0.863883	
問1成分得点主成分分析3	-0.32322	-2.13123	0.038827	*
問1成分得点主成分分析4	0.250625	1.709521	0.094563	
問1成分得点主成分分析5	0.133018	1.030883	0.308359	
問1成分得点主成分分析6	-0.28039	-2.17192	0.035423	*
問2成分得点主成分分析1	-0.09292	-0.70645	0.483718	
問2成分得点主成分分析2	0.284209	1.837629	0.073033	
問2成分得点主成分分析3	0.330264	2.640202	0.0115	*
問2成分得点主成分分析4	0.070057	0.581827	0.563721	
問2成分得点主成分分析5	0.021184	0.167601	0.867683	
問2成分得点主成分分析6	-0.13579	-0.96206	0.341398	
問3成分得点主成分分析1	0.306146	1.986128	0.053417	
問3成分得点主成分分析2	0.061703	0.481776	0.632408	
問3成分得点主成分分析3	0.160612	1.182991	0.243312	

従属変数：q401

表に見られるように、問1の第3成分（配偶者への期待）、問1の第6成分（仕事が断れない）、問2の第3成分（自己表現・ケア）が「男らしくないと言われること」に対して5%水準で有意に高い寄与を示している。また、問1の第4成分（家庭外達成志向）、問2の第2成分（分業・メンツ）、問3の第1成分（パートナーとの心の交流）なども、有意ではないが、比較的高い寄与を示しているように見える。

これを解釈すると、配偶者への期待が低く、仕事を断ることができる人が「男らしくない」と言われる、ということになる。さらにそういう人は、家庭外達成志向が弱いという傾向も見られるかもしれない。ただし、同じ人が、男の感情表現や子どものケアに消極的で、男は仕事だと思っており、パートナーとの心の交流が少ない、という結果も出ている。このあたりの一般的予想との矛盾については未詳である。今後の分析を期したい。

なお、「男らしくないと言われる」という問いに対する回答の回答者カテゴリーごとの差異を、一元配置分散分析およびF検定で見ると、有意差があったのが年代（ $p < .01$ ）、結婚現状

($p < .001$)、結婚歴 ($p < .001$)、職業 ($p < .05$) で、離別歴、学歴では有意差はなかった。年代では20代がもっとも「男らしくない」と言われ、50代がもっとも言われない。結婚については、未・非婚者の方が「男らしくない」と言われ、既婚者・経験者の方が言われない。職業では、「男らしくない」と言われるのは主夫、学生、専門職の順で、もっとも「男らしくない」と言われないのは役員・管理職であった。

4. 「男らしさ」への評価

質問紙調査では、「男らしさ」についてもう1点質問をおこなっている。その「男らしくありたいか」(問4第2項目)という質問に対して、上記で分析した行動様式、意識、パートナーとの関係がどのように寄与しているかも見た。方法としては、前章と同様、問4第2項目への回答(4択リッカートスケール)を従属変数とし、上記で算出した問1～3の主成分得点を説明変数として重回帰分析をおこなった。これも同じく、本来共分散構造分析によって計算しモデル化をおこなうのがより適切であるが、入手できる統計ソフトの都合により重回帰分析を用いたもので、試行的なモデルと考えていただきたい。

分析により、表4-1のような結果が得られた。

表4-1 問4-2「男らしくありたいか」に対する重回帰分析

	標準化係数 (ベータ)	t	有意確率	
(定数)		14.97121	0.000000	***
問1成分得点主成分分析1	-0.04896	-0.41429	0.680722	
問1成分得点主成分分析2	0.268739	2.123019	0.039548	*
問1成分得点主成分分析3	0.175973	1.187981	0.241362	
問1成分得点主成分分析4	-0.08793	-0.6141	0.542388	
問1成分得点主成分分析5	-0.04369	-0.34663	0.730562	
問1成分得点主成分分析6	0.264942	2.101176	0.041524	
問2成分得点主成分分析1	0.314866	2.450819	0.018395	*
問2成分得点主成分分析2	-0.01007	-0.06666	0.94716	
問2成分得点主成分分析3	-0.07919	-0.64814	0.520342	
問2成分得点主成分分析4	0.091769	0.780308	0.439484	
問2成分得点主成分分析5	0.26332	2.13293	0.038679	*
問2成分得点主成分分析6	-0.07415	-0.53788	0.593431	
問3成分得点主成分分析1	0.025199	0.167377	0.867858	
問3成分得点主成分分析2	0.094018	0.751581	0.456397	
問3成分得点主成分分析3	-0.0388	-0.2926	0.771235	

従属変数：q402

表に見られるように、問1の第2成分（近所づきあい）、問1の第6成分（仕事が断れない）、問2の第1成分（経済力・忍耐）、問2の第5成分（仕事志向）が「男らしくありたい」ということに対して5%水準で有意に高い寄与を示している。

これを解釈すると、近所づきあいがよく、仕事を断ることができず、男は経済力や忍耐をもつべきだと思っており、男は家事に向かないと思っている人が「男らしくありたい」と言う、ということになる。

なお、「男らしくありたい」という問いに対する回答の回答者カテゴリーごとの差異を、一元配置分散分析およびF検定で見ると、年代、結婚現状、結婚歴、離別歴、学歴、職業の全6カテゴリーいずれでも有意差はなかった。見かけ上多少は差があると思われるのは職業による差であるが（ $p = .215$ ）、現場労働、役員・管理職の他に無職、主夫でも高く、比較的低かった学生、専門職でも、平均すれば「どちらかといえばあてはまる」という回答で、差は大きいものではなかった。

5. 考察

以上、「男らしさ」について、調査データ解析にもとづいて検討してきた。ここで得られた知見は、調査対象の限界、そして分析手法の限界により、一般化可能性に限界があることは否めない。ではあるが、特に主成分得点と回答者属性との関係などから、興味深い結果が明らかになったように思う。

今回の分析結果からは、総じて、「男らしさ」というものが、ワークライフバランスのうちではワークに特化することだ、と考えられていることが確認されたように思われる。成分得点のカテゴリー間の有意差や、「男らしくない」「男らしくありたい」ということに寄与することがから見えてくるのは、男らしさというものが、職場での達成志向やその残余である家庭・感情生活への消極性と結びついていることであった。

女性学の成果によれば、女は「性化」すなわち性的な存在として自己形成すべき、という圧力にさらされている（永田 1997）。今回の調査結果からは、逆に男が「非性化」すなわち労働マシンとして自己形成するのが望ましい、と考えられている現実が浮かび上がった、と考えてもよいのではないだろうか。

そのような傾向が強い中で、筆者が注目に値すると考えるのは、年代では40代の行動様式および意識、そして結婚と男らしさとの関係である。

年齢については、一般的に、年齢が高いほど「男らしさ」への志向が強いと考えられている。そして、今回のデータも、50代の回答傾向などはそれを裏づけるものであったように思う。しかし、40代に関しては、「男は経済力や忍耐力をもつべきだと思ふ」という傾向が全年代中最低で

あったり、男の感情表現や子のケアについて30代よりも少し積極的であったり、と、いささか興味深い傾向が見られた。なお、これに関連して付言するならば、筆者が関与したセクシュアル・ハラスメントに関する調査において、40代など中間の世代が、より若い世代やより上の世代よりも危機感が強いという結果が出ていることは興味深い（名古屋市立大学セクシュアル・ハラスメント専門委員会 2003：98-99）。

また、既婚者の傾向も興味深い。既婚者は確かに、家庭外達成志向が強いなど、一般的な男らしさを体現している部分もあるが、一方で、男の感情表現や子のケアに積極的であったり、男は仕事上の能力が高く出世をめざすべきとは思っていなかったりなど、一般的な男らしさから外れる部分もある。また、女は性暴力について騒ぎすぎと思っているなど、年齢効果との関係が推測される傾向もある。

感情表現や子のケアなどへの積極性が、もし結婚という経験によってもたらされるものであるならば、結婚生活やパートナーとのコミュニケーションによる学習効果が予想される。このことはきわめて興味深い。「男らしさ」をより平等主義的なものに向けていこうとすると、結婚及びパートナーとの関係によってインパクトを与える、ということも可能となるかもしれない。

ただし、この希望的観測についても留保は必要である。年齢効果との関係など、まだ十分解明されていない部分は多い。より洗練された標本抽出、より洗練されたモデルおよび手法による分析が望まれる。今後の課題としたい。

文献（著者名五十音順）

- 多賀太 2001 『男性のジェンダー形成—〈男らしさ〉の揺らぎのなかで—』、東洋館出版社。
- 永田えり子 1997 『道徳派フェミニスト宣言』、勁草書房。
- 中村正 1996 『「男らしさ」からの自由—模索する男たちのアメリカ—』、かもがわ出版。
- 名古屋市立大学人文社会学部現代社会学科社会調査実習「男性問題」班 2003 『男性問題—「らしさ」からの解放—』（2002年度・現代社会学科調査実習報告書 第6分冊）、名古屋市立大学人文社会学部現代社会学科。
- 名古屋市立大学セクシュアル・ハラスメント専門委員会 2003 『名古屋市立大学教職員等を対象としたセクシュアル・ハラスメントに関する調査報告（最終報告）』、名古屋市立大学。（<http://gdpc1.adm.nagoya-cu.ac.jp/kousei/pdf/hyousi.htm>より入手可能）
- メンズセンター編 1996 『「男らしさ」から「自分らしさ」へ』、かもがわ出版。
- メンズセンター編 1997 『私たちの「私」さがし—ジェンダーとしての男に気づく—』、かもがわ出版。